共五

和書門
類 二一七四
號
函 六〇
架 一一
冊 五

内閣文庫
和書
類 二一七四
號 五五
函 二三
架

内閣文庫
番號 和 21174
冊數 5 (2)
函號 213 59

国立公文書館
National Archives of Japan

花迺家文庫

近世奇跡考巻之二

江戸　山東軒主人著

一　佐文山戯書

佐々木氏。名ハ襲字ハ淵龍。文山と号シ。墨花堂と稱ず。俗称百助。玄龍の弟子。西空住小住も。志風流ミ厚く。兄玄龍とともに書を以て名々一。西ゐに都鄙神社佛閣の匾額皆書を文山ゐもと也。性甚酒を好ム。醉裏筆をふるゑい殊ゐ絶妙ゑ。世ゐ醉龍の後身ゐ云。稿本其角ハ玄龍ゐ書を学ぶ。西ゐ文山ゐ友ゐ酒友の交りふかし。一日文山冨家の主人一説ゐ兄文ト云および其角と花街にあそび。酒ゐけゐハゐる時。揚屋の主人文山ゐ書名ゐを知りて。春山櫻花を画ゐる。屏風を出して賛辞をえ。文山筆をとりて此所ゐ

便無用を書き。主人これを見て頗不興の色あり。其角筆をとゝめ。
ふみつぎて花の山と書つけ俳諧の一句をなす

此所小便を用花の山

主人大ゐなるべつひに家宝とせり。其比あづま童のにぎりあり。此ゐ
小便を用佐文山とぞ云れけるとぞ

此事世ゐ伝へて風流の話柄とせり。文山享保十年乙
卯五月七日病て没せり。享年七十七芝増上寺塔中浄蓮院に葬る

二　紀文傳

紀伊國屋文左衛門ハ。材木問屋を家業として。世ゐきこえ
豪家の性活氣ゐして。常ゐ花街雑劇ゐおびて。任侠をこゝ
千金をあげらちて快しとせず故に時の人紀文大尽と称じて。嫖
名一時ゐこゝ。室永の頃まで。本八町堀三丁目にべて一町紀文が居宅
あり。毎日定りて。髪さし七人づゝ来りて髪をさゝ。ご八客をむかふる
度に。あゝしき髪を去きえるゆゑとぞ。此一事をもつて。それ
豪富あるを知るべし。また紀文が家ゐ出入せしゆゑの子孫今猶本
八町堀二丁目ゐあり。此事をかゝるさ。又一時揚屋町泉屋平四郎
がもとゐて。丼ゐゐ粒金を入て蒔あゝしと云伝ふ。正徳の比家な
ほ〳〵剃髪して。深川八幡一の鳥居の辺ゐ住しが。享保十九年四月
廿四日。其隠宅ゐおいて身まかりぬ。深川霊巌寺塔中浄等院に
葬る。法名を帰性融相と云
紀文俳諧を。晋子其角ゐ学び。千山と称ず。紀文。其角。敬雨等と共
に千山宅にて。剃髪ゐ八乙女ゐ和樂男ゐ証左ゐあり

国立公文書館
National Archives of Japan

同

同

病起　千山ヨリ菊ヲ得テ

大母衣のうしろを押や瓶の菊　同

隅ふ巣を塗ることぬれ〳〵　千山亭新宅雪舟の絵ふ　同

五月雨

うう〳〵も老の眼や　土用干　敬雨

偉紀文亡父

同

○紀文ハ一代の富家なりしおもふ人おわし。已ふ父あり。父紀州熊野よりも

江戸ふいでく一代ふをみりしぞ　千山

菊のちり　三徳の摺り出るまで裏の菊

香非時　ふ其角一周忌に紀文が手向の白あり

黒方や年ハ経れども臘月　同

類柑子　ふ風流をそめきの飛花を惜むとかきて左の白あり　追悼の白之

今もいま錦繡の人よふこそ　同

紀文うるおつさてパ〳〵〳〵の奇談あれども。人口ふ伝ふるのこ〳〵

ふる話もあけれバ。こゝにもこゝにつ　後ハ昔ハ語ふ寛延の比。俳諧

師存義。小網町ふ住。其菴ハ紀文ふ裏

へて後住りる家なりしこゝ。ふ居の北側ふ

(三)宗珉一輪牡丹目貫

宗珉横谷氏。名ハ友常。遯菴と号す。俗称次兵衛。檜物町ふ住す。一

輪牡丹の目貫をのこ。三云ハ。世ふ一具の名物ふ。伝へて云。宝永の比紀文宗

珉ふ牡丹の目貫をのこ。手附金十両をおくる。三年過ふ〳〵

ハ。紀文待侘て。ちきりふ催促せり。仕方宗珉が意ふかち

紀文ふ。其後中過てあり上りしを。

宗珉。それより生涯一輪牡丹を。ぞ。ふ。ふ。ふ。金五十両を以て謝物とす。

ぞ。宗珉享保十八年夏身まかりぬ

彼目貫。某氏の秘蔵なるを。人戸張氏。ふ一看して。露なりしを

惣金

宗珉作　ちりつけらくのごとくにあり

四　久米平内石像考

淺草寺の境内に久米平内の石像を云ものあり。何人の像と云ふ詳ならず。瀬田問答に云。氏は久米にあらず。兵藤平内を誤て久米平内と云歟。菩提寺は駒込曼殊寺山大智寺と云禪寺なり。ときに青き生石の夫婦同會の墓碑あり。兵藤氏無關一素居士　久米氏松室壽大姉

右の法名ありしびてあり。付あり。此碑平内が存生の時建立を。死後に死せる年月を彫り入ざれば。其年月詳ならざる歟。淺草寺。平内が石像の加り家のしるしに。又同會の墓碑ありて年月をしるす

上に仏像アリ　無関一素居士　天和四癸亥年六月六日　貞享二乙丑年十二月十三日　松室壽大姉

（第三癸亥は天和三年にあらず。平内が存生の時建立なれば年月を彫り入ざる時の誤歟）

かゝるのごとくなれば。死せる年月はあきらかなりといへども。いづれの家に仕へ――武士と云る。諸説に異あり――て詳ならず。浪人――て赤坂に住と云。淺草寺後門の外金剛院に借地――て住ともいへり。強勇の者にて。鈴木九太夫入道正三石平左人と云因縁の作者の門人と云。仁王座禪の法を修行せ。彼石像はまのあたりなるべし

五　右近人形

【已往物語】写本に昔右近源左衛門と云若者京都より下り三味線引一人地うたひ一人にて藝をする時今のかつらなどといふものなく黄いろのふくさものに布をさき糸を付額にあてて月代をかくせし面体奇麗の若者なれば女のごとくに見ゆる。扨藝は海老下りと山崎下りなどいふ狂歌を地うたひにうたはせ。それを小舞にして舞ふ。又は業平餅搗。買あふ不和を独狂言に舞ふ。諸人おもしろがりて物まね。此源左衛門黄なるふくさものかぶりたる体を。人形に木にても作り紙にて張ぬきにも作りて。おびただしく賣ると云々

案るに寛文二年。市村座にて源左衛門海老下りの狂言を為。其唱歌等が骨董集に詳也

(六)小兵衛人形

江戸に名高く聞えし。坊主小兵衛と云俳優は。延宝。天和。貞享の頃を盛に経たる者。外形は。かしら糸鬢にてかりそめに見えれば坊主のごとくなれば名づけしなり。同時に坊主百太郎。坊主段九。小坊主などいふ俳優あり。皆小兵衛をまねびたり。これ小兵衛が次女を五月の兜人形に作りはじめて。これを小兵衛人形と云ふ。これ後段十郎小太夫なども兜人形に作りしとぞ

以上元禄六年板本【四場居百人一首】にあり

小兵衛人形の句左の如し

【五元集】

此友や年をとらぬさまで白髪二毛の身をもちて松よの若郎どのあなりけりとの心なれば今の人形の風俗さまざまに小兵衛かどいふ人形はなし

我むかし坊主小兵衛や花菖　其角

同

坊主小兵衛は心して今小兵衛坊主と申ければ

坊主小兵衛小兵衛坊主とかへり花　同

案るに小兵衛もえぎ羽おりを好みて着たり。これより世の中に小兵衛もえぎ羽おり。この名いつべしにちらりひらしやうたひ。写本【洞房語園】に云。二朱判吉兵衛が大尽舞に小兵衛の坊主衣のもえぎ羽おりを作りしも是也。【本朝文鑑】に支考が狂名を坊主仁平といひしも小兵衛になぞらへたる名なりといつの世にもてはやされたる者とおもふ

右近源左衛門舞圖（まひのづ）　古画ヲ摸ス

元禄六年印本
四場居百人一首
此畫アリ摸出ス

上ニ狂哥アリ畧

談洲樓藏本

坂東小蔦

㊆ 羽生村累古跡

下総國岡田郡羽生村百姓与右衛門妻かさね。正保四年亥八月十一日夫与右衛門が爲に。絹川において殺害せらる。其所を今にかさねヶ淵と云。与右衛門後妻をむかふる事五人。みなかさねが爲にとり殺さる。六人めの妻娘きくをうむ。きく十三の年。寛文十一年亥八月中旬。其の母も又とり殺る。翌寛文十二年子正月四日より。累が怨霊又きくにつきて苦しめけるを。同年三月十日。祐天和尚の化にあひて。かさね成佛し。きく一命をたもちけり【死霊解脱物語　元禄三年板本】【新著聞集　寛延二年板本】等にも載して人のよく知れる事なれバ。爰にハしるさず。さて

ゆゑよりぞ。寺記に与右衛門堀越氏と。かさね実名をすぎと云。累の字かさねと訓ぜるゆゑに。まくハよびけるならし。法蔵寺の過去帳に俗名るいと

あることを以て詳にしるべきなり

○芭蕉が【奥の細道】に下野の那須野にて小さきものふたりつきて野をさまよひてあるしとて。ひとりハ小姫にて。名をかさねといふ。聞なれぬ名のやさしかりけれバとて

かさねとハ八重撫子の名成べし　曽良が句に

とあり。これも累といふ名を訓みてよびしなるべし。かさねといふをやさしき名のやさしと思へるハ。元禄の頃ハ羽生村のかさねがうはさまでせのかハへさらじにや

与右衛門後に剃髪して西入と云。延宝四年六月廿三日死す。其子孫今もなほ羽生村にありて。代々堀越与右衛門と名告る。当代にて西入与右衛門より五六代相續をなしぬ。きくハ長寿にて。享保十五年戌五月三日。七十二歳にて身まかりぬ。同村羽生山法蔵寺ハ与右衛門代々の菩提寺也。累・助・きく。三人の墓あり。累・助成仏得脱の絵曼陀羅あり。明顕瑞祥録と云古書二巻あり。かさね等が事跡を録せり

法蔵寺過去帳写

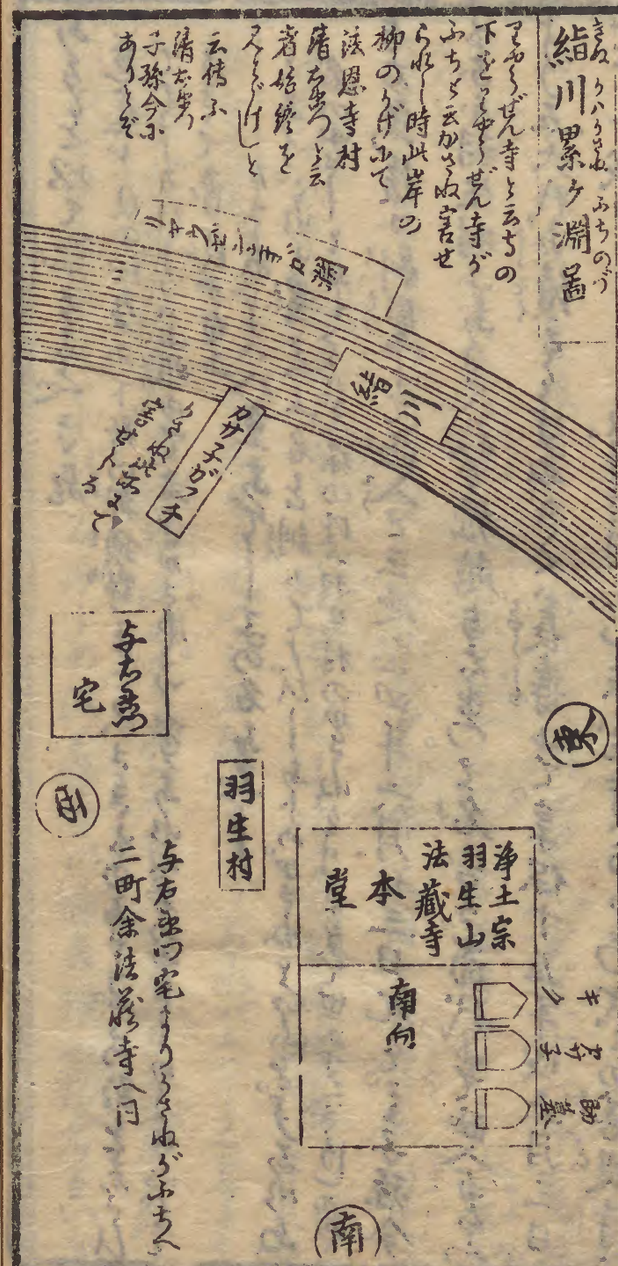
理屋松貞信女　俗名ろい行年三十五
正保四丁亥年八月十一日。初法名香誉妙林

單到真入童子　俗名。助。三歳。寛文十二壬子四月十九日此年号八助
得脱の年之実ハ慶長十七壬子年四月十九日死

榮譽不生妙槃信女　俗名きく行年七十二
享保十五庚戌五月三日

以上

結川累々淵畫



八　歌比丘尼

殘口之記　ふ。歌比丘尼むりハ。脇挾ー文匣ふ巻物入て。地獄の絵説ー。血の池のけがれをいませ不産女の哀を泣ちる業を。年竜の戻りに。烏牛王配りて。熊野権現の吏觸めきくしげ。いつのわぐよりかくー白粉紅つけて付髪帽子に帯ぐ廣くなー云ー下畧

所記　板本　万治中　云。比丘尼ども一二人いで来て。ふを。ふ頌歌ふ。もとけ〻ぬぞ。丹前ぐやくふ〻ふ。たぐありくこ出こしくひきづりくるぐくと次ふ紫垣明暦中　ちゆふ。ふ。ふ。山のもの奴ぐくの踊歌ちるを。比丘尼節ふのせてくふ。みぐくの眉わくく薄化粧ー歯雪よりもちろくくろき帽子ふて頭をあぢふつむ云ー下畧。かぬ熊野比丘尼の風万治の比てや変りくり

東海道名

くるぬおんあまのつの
累怨霊圖

熊野比丘尼繪説圖

○紫の一本　おめつゝ町ハ永玄お雅ち松。宋信あ[illegible]
[illegible]天和中のまえ。めつゝ町ハ神田多町の古名こ此歌びくにの比丘尼あ[illegible]
今ハ[illegible]名のみ残れり

九　安樂菴落語

安樂菴策傳ハ。おとゝ[illegible]の上手。元和九年。七十の年醒睡笑と
いふ笑話本八冊をつくる。万治元年此人茶道おいて名[illegible]よ
へ[illegible]。[illegible]上手をあるゝを[illegible]
安樂菴の列伝ハ。此人より出ぬ

十　露の五郎兵衛辻話

支考が本朝文鑑ふ露の五郎兵衛辻談義の説といふ文をのせて云。
此者ハ夷洛ふ名を彩り出て。洛陽の仏事祭礼ふ彼が芝居を張
ざるゝ所。世ふ云辻ゞ色しの元祖こ云。延宝。天和の時代こ。祇園真
葛が原或ハ北野ふおゝ[illegible]ふ露が[illegible]と[illegible]ふ草紙五冊あり

享保十三年印本徽雨の梅の図あり

延宝五年板本 かくれ笠ふ

重高

似船

屋かくれ月ふおちくる初雁

まくぞ 昔の露や質ふおくらん

露ろふ。此面屋かくれ月ふおちくる初雁。露の五郎兵衛が。辻ぜんしゅうと。ふくまもせくり。

類相子 ふも「ふ中ふかる五郎兵衛の露ふつふるあり。ふ名ふきを知ふ上ふの中ふくふんとこ江戸の志乃れ」

十 鹿野武左衛門仕形話

元禄の頃江戸ふ。坐敷仕形ふ芸とつふすおとふる。長谷川町の。鹿野武左衛門ふ。ふ巻筆ふ玉笑話本五冊をあふハ。横山町三丁目。保慶中橋。伽羅ふ左衛門。同ふ。伽羅四郎ふ。ふ名あり。貞享四年板

江戸鹿子 元禄二年板

戸圖鑑ふ入ル

十二　大津繪考

大津絵。或ハ追分絵ともいふ。いづれの時代よりかき始しやいまだ詳ならず。元禄三年板 東海道絵図 ふ。大津大谷の辺。伝絵いろ〳〵あり。

大津絵の筆のすゝめハ何佛

かゝれバ。元禄の頃ハ仏画をもつぱらにかゝ[illegible]ふ者あり。俗鮮ふて。常ふハ農業ふ 本朝俗談 志ふ。飛州の山中ふ。毛坊主ともふ者。大津絵の[illegible]蕉翁。人丸ハ歌ハ尊師ともありてこれを葬る。本尊ハ大津絵の平三佛なりと云。世ふ伝へて。浮世又平ゞかきとゞむとゝ[illegible]ふ。たゞしふある記あり。室ふ二浮世又平ハ。越前の産ふ姓ハ荒木。母の姓岩佐を冒よく時世の人物を画ふ。時の人

浮世又多平と称ず。世ふいふある浮世絵ハ誤りなり。享保四年 又平といふハ誤りなり。享保四年 傾城反魂香といふ浄瑠璃ふ。土佐の末裔浮世又平重かきといふ者。大津ふ住て絵をかきて[illegible]ふ。安説を傳ふる。或ハ別ふ大津又平といふ者ありてかき始む。享保のはじめ。其子孫ありしとぞ。予ゞをさむる。ふるき大津絵に。八十八歳又平久吉ともかきて花押あり。前の説のごとく。大津ふ又平といふ者ありしを。浮世又平ふ[illegible]ゞ[illegible]てかの浄瑠璃につくりしなり。虚説を傳ふ[illegible]。さハいへ。支考ゞ 本朝文鑑 ふ。浮世又平ハ大津絵の元祖といふ。文鑑ハ享保三年の板ゆゑ。彼浄瑠璃より。一年ハ人ありしハ。其前より伝へしなるかゆゑ。[illegible]。[illegible]れかとゝ[illegible]れ 好古日録 ふ[illegible]。又[illegible]ゞ伝[illegible]ふ。

大津みて賣画をかくこと。あるべしとおもおえど。予又その人が画筆をさめて。其画風をえらん。大津絵をかくべき風あるべきか。古代の大津絵を考るに。古土佐の風味なるものゝ残れるかゝるものなるべし

貞享四年印本[見流旅日記]に大津追分伏見の道中器奴が持のいきあひのあい絵をとるが大谷云。かゝれば貞享の以已ニ奴の持る絵あしとおぼ

十三 辰之助鎗踊猫狂言并肖像

水木辰之助。元禄中諸人ふ免でゝ。歌舞妓の女形なり。元禄四年。京四条より始て江戸ふ下り。市村竹之丞座。顔見せふ四季御所桜と云。四番つゞきに狂言を興行せ。是を辰之助が土産狂言と云。辰之助ゝる堀の役篝二番目ふ鎗をどりの新作。第三番目ふかゝ猫の不作をせしに。江戸中こぞりて賞美し。此狂言を見ざるをそぢとせしなり。○猫の所作の意趣。ハ。ゝる那の中くあて。ゝふ男。我実の兄ゝるこゝゝゝれて。夫婦と成ゝて。胡蝶ふゝるゝふ狂言ゝ。ふを辰之助がゝゝゝ猫にせしなり

焦尾琴 猫恋句合 疑恋

花の夢胡蝶ふ似ゝる辰之助 真角

寄舞妓恋

恋種の猫の狂言あけふ 堤亭

辰之助ふ寄つゝふ

五元集

煤掃や諸人がゝゝる猫 其角

[彩板四季御所桜]と云書四冊あり。珍昏ゝゝゝの白ゝゝ。その節の狂言なゝゝ。ゝゝ。ゝ四流をゝゝゝ猫の所作の面をゝのまゝふゝゝゝ。下ふあふハをゝゝ。○鬘ふひしをつくるゝ。辰之助ゝゝゝ。三年市村座ゝおいて辰之助七変代の所作をして大ゝり世ゝ。元七変代のゝじめゝ

元禄年狂言本
四季御所櫻三の巻ニ
此畫ありまさくつゆて
ほうぐりもふ云
ゆさせり

京　川津山白藏本

同書三の巻ニ
此畫あり

元禄十三年板本遊男評林ニ
此畫アリ是スナハチ
辰之助ガ肖像ナリ
木村太朝蔵本
奇跡考巻之二終
木木辰之助

国立公文書館
National Archives of Japan